# 古代ディルムン王国の起源を求めて

―バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト 2018―

後藤 健 東京国立博物館客員研究員

西藤 清秀 奈良県立橿原考古学研究所技術アドヴァイザー

安倍 雅史 東京文化財研究所研究員

上杉 彰紀 金沢大学客員准教授

岡崎 健治 鳥取大学助教

堀岡 晴美 国士舘大学イラク古代文化研究所共同研究員

原田 怜 東京藝術大学特任助教

間舎 裕生 東京文化財研究所アソシエイトフェロー

山口 莉歩 岡山大学博士前期課程学生

## Archaeological Research on the Origins of the Ancient Kingdom of Dilmun: the Bahrain Wadi as Sail Archaeological Project 2018

GOTOH, Takeshi Visiting Curator, Tokyo National Museum

SAITO, Kiyohide Technical Adviser, Archaeological Institute of Kashihara, Nara Prefecture ABE, Masashi Researcher, the Tokyo National Research Institute for Cultural Properties

UESUGI, Akinori Visiting Associate Professor, Kanazawa University

OKAZAKI, Kenji Assistant Professor, Tottori University

HORIOKA, Harumi Collaborative Fellow, the Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University

HARADA. Rei Project Assistant Professor, Tokyo University of Arts

KANSHA, Hiroo Associate Fellow, the Tokyo National Research Institute for Cultural Properties

YAMAGUCHI, Riho M.A. Student, Okayama University

#### 1. はじめに

前4千年紀後半、南メソポタミアに世界最古の文明 が興った。しかし、広大な沖積平野である南メソポタ ミアには、金属や貴石、木材、石材といった文明生活 を営むうえで必要な資源が存在せず、こうした資源を 周辺地域から入手する必要があった。

ディルムンは、メソポタミアの文献に登場する周辺 国の一つである。この王国は、とくに前2千年紀前半 (前2000年~前1700年)に、メソポタミア文明とオ マーン半島のウンム・ン=ナール文明またインダス文 明を結ぶペルシア湾の海上交易を独占し繁栄したこと が知られている。

メソポタミアには、ディルムンを経由し、銅や錫、砂金、象牙、カーネリアン、ラピスラズリ、黒檀、真珠など大量の物資が運びこまれていた。いわば物流の面からメソポタミアを支えたのが、ディルムンであった。現在、ペルシア湾に浮かぶバハレーン島が、このディルムンに比定されている。

## 2. バハレーン、ワーディー・アッ=サイル 考古学プロジェクト

筆者たちは、2014年度よりバハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト(Bahrain Wadi as Sail Archaeological Project)を実施している。本プロジェクトの目的は、ディルムンの起源を考古学的に解明することである。

ワーディー・アッ=サイルは、バハレーン島内陸部を流れる全長 4 km ほどの枯れ川である(**図1、2**)。この枯れ川の両岸には、かつて千基を超す古墳が存在していた。バハレーン島には複数の古墳群が現存するが、このワーディー・アッ=サイル古墳群を除くと、いずれの古墳群も前 2050 年~前 1700 年に年代付けられている。ワーディー・アッ=サイル古墳群のみが、一段階古い、前 2250 年~前 2050 年に年代付けられている。

前2050年~前1700年の時期は、ディルムンの「文明期」に相当する。この時期、ディルムンがペルシア湾の海上交易を独占した結果、社会の複雑化が急速に



図1 1950 年代の古墳群の分布 黒が文明期の古墳、灰色が形成期の古墳。現在、形成 期の古墳の大部分は開発により失われ、ワーディー・ ア=サイル古墳群しか残存していない。

進行している。ディルムンの王都とされる城壁都市カ ラートゥ・ル=バハレーン(Qal'at al-Bahrain)やバル バル神殿(Bārbār Temple)といった公共神殿、また直 径が50mを超える「王墓」と呼ばれる大規模墳墓が 建設されたのがこの時代である。

一方、ワーディー・アッ=サイル古墳群が形成され た前 2250 年~前 2050 年の時期は、「形成期」と呼ば

れている。この時期、ディルムンがメソポタミアの文 献資料に貿易国として言及されることはほとんどない。 この時期のバハレーン島には城壁都市や公共神殿、巨 大な王墓が存在しないため、形成期は階層差がなく比 較的平等な社会であったと考えられてきた。しかし、 2008年にデンマーク隊が形成期のワーディー・アッ =サイル古墳群にも「有力者の墓」が存在することを 指摘し、形成期にも社会の階層化がある程度進行して いたことが明らかとなった。

文明期の王墓には「周壁」を伴うものが存在し、文 明期には周壁の構築が王墓にだけ許された特権行為で あった可能性が高い。デンマーク隊は、ワーディー・ アッ=サイル古墳群にも文明期のものに比べると規模 は劣るものの周壁を伴う古墳が存在することに気がつ き、後の王墓に繋がる最初期の「有力者の墓」である と論じた。

このようにワーディー・アッ=サイル古墳群は、 ディルムンにおける国家形成を考えるうえで注目を集 めている遺跡である。以下、2018年の1月、2月に実 施した第4次調査の諸成果を報告したい。

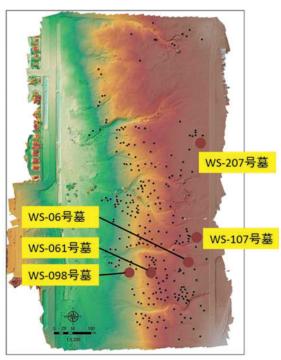
## 3. 第4次調査の成果

### 3.1. 207 号墓の発掘

第4次調査では、合計5基の古墳を発掘した(図3)。 ワーディー・アッ=サイル古墳群には、デンマーク隊 が指摘したように最初期の「有力者の墓」と推定され る周壁付き古墳が存在する。筆者たちが調査に入る前、



図2 ワーディ・アッ=サイル古墳群の Google 画像(枠で囲った範囲が発掘調査を実施している箇所)



**図3** ワーディー・アッ=サイル古墳群北東部 と今年度調査した5基の古墳

同古墳群では、デンマーク隊によって3基の周壁付き 古墳の存在が指摘されていた。しかし、筆者たちは、 デンマーク隊が発見した周壁付き古墳 BBM27070 号 墓の西側で、2015年に新たに周壁付き古墳と思しき 古墳を3基確認した(図4)。207号墓もその一基であ り、この古墳が本当に周壁付き古墳なのかを確認する ため、今年度発掘を行った。

発掘の結果、残念ながら207号墓は周壁付き古墳ではないことが判明した。墳丘の石が抜き取られ、そこに風成層が堆積した結果、周壁付き古墳のように見えていたにすぎないことがわかった(図5)。残りの2基もまた、今回の調査によって周壁付き古墳でない可能性が高まった。

しかし、この 207 号墓は、墳丘の石が抜き取られる 以前は、直径が 9.5 m と周壁付き古墳や大型古墳につ ぐセカンド・クラスの大きさを持っていたことが明ら かになった。主体部からは、側臥屈葬した壮年と考え られる人骨が出土した。また、膝元からは、煤がつい たヒツジ(ヤギ?)骨が出土し、死者に肉料理が供され ていたものと推測された。

#### 3.2. 107 号墓の発掘

107 号墓は、今まで調査した古墳とは明らかに様相が異なる古墳であった。直径は 6.5 m と標準的であったが、古墳の高さが 30 cm ときわめて低く、石室も一段積みであった。また、石室の形も、南北にアル



図4 発掘前の207号墓

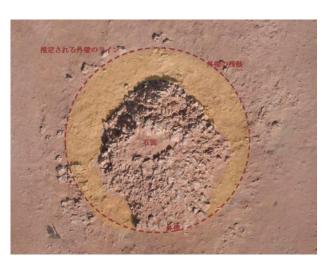


図5 発掘後の207号墓

コーブと呼ばれる副室が付随しT字形をしていた。 私たちの調査で、アルコーブを持つ石室が確認された のは今回がはじめてである(図 6)。

石室からは人骨とヒツジ(ヤギ?)と思われる獣骨が出土したが、攪乱を受け残存状態は極めて悪かった。しかし、被葬者の頸部に該当する位置から2点の腐食加工されたカーネリアン・ビーズが出土した(**図7**)。報告者の一人(上杉)がSEMを用いて観察したところ、形態だけではなく製作技法からも、インダス地域からもたらされた可能性が高いことがわかった。

また、107 号墓の南側には小型古墳が付随しており、 ここからは側臥屈葬した幼児骨が出土した。107 号墓 の被葬者の子供を埋葬したものと推測された。

#### 3.3. 06 号墓の発掘

ワーディー・アッ=サイル古墳群は、いくつかの支

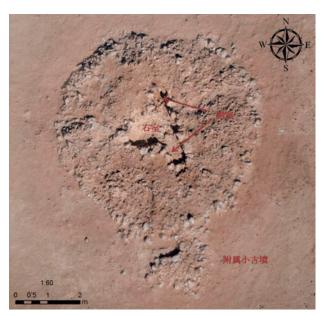


図6 発掘後の107号墓



図7 107 号墓出土のカーネリアン・ビーズ

群にわかれている。今回、第2支群に属する古墳を3 基(06 号墓、061 号墓、098 号墓)を発掘した。第2支 群には数十の古墳が含まれているが、そのなかで最も 重要と考えられる古墳が昨年度発掘した04号墓であ る。04号墓は、第2支群のなかで中心的な場所に位 置し、発掘前の直径が11.5mと最大級の古墳であっ た。この04号墓と一緒に4基の古墳(03号墓、02号 墓、05号墓、06号墓)が斜面の一番高い所に円弧状に 配置されているが、その西端に位置するのが06号墓 であった。06号墓は、発掘前の直径が9.5mと古墳 群の中ではセカンドクラスの大きさを持ち、また石室、 外壁に大型の石材が利用されていた(図8)。04号墓の 被葬者に継ぐ人物が埋葬されていたと推測されたが、 残念なことに人骨の残存状態は悪く粉末状の骨片が検 出されただけであった。また、石室からは調理の結果 一部に焼き目の残るヒツジ(ヤギ?)と思われる動物骨 も出土した。

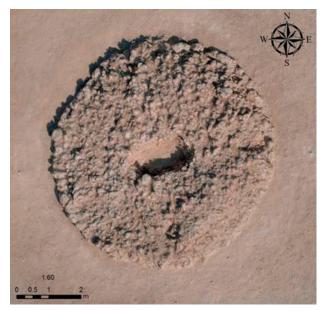


図8 発掘後のWS-06 号墓



図9 061 号墓から出土した人骨

### 3.4. 061 号墓の発掘

061 号墓は斜面の中央に位置し、発掘前の直径が6.5 m と標準規模の古墳である。発掘の結果、東西約1.40 m、南北約0.75 m ほどの標準規模の石室が検出された。この061 号墓からは、側臥屈葬した壮年男性と考えられる人骨が出土した。骨は前腕以下と足首以下などを欠くが、それ以外のほぼ全身が検出され、いままで検出された人骨のなかで、最も残存状態が良い人骨であった(図9)。遺体は頭を東側に向け、主体部南壁に背を付け膝を曲げ、右半身が下になるよう安置されていた。ヒツジ(ヤギ?)と思われる焼けた動物骨が、石室西部から集中して検出された。

#### 3.5. 098 号墓

098 号墓は、第2支群の中でも、最もワディ底に近いところに位置している古墳である。発掘前の直径は7mと標準的であったが、墳丘にはきわめて小型の礫



図10 発掘中の098号墓

が利用されていた(図10)。墳丘に大型の礫が利用されていた大型古墳04号とは対照的であった。人骨は残存状態が悪く、ほぼ出土しなかった。今回の調査を通じて、古墳にはかなりの差異が存在することが明らかとなった。今後の調査を通じて、こうした差異が被葬者の社会的階層差を示すのか、あるいは時代差によるものなのかを検討していきたい。

## 4. 見えてきたディルムンの起源

近年、前1700年ごろに築造された文明期の王墓の一基から、楔形文字でディルムン王の名前を刻んだ石製容器の破片が出土した。この石製容器には、「アガルム部族の者、エンザク神の僕、ヤグリ・イル」と書かれていた。この王名がアモリ系の名前であったことから、バビロンやラルサ、マリなどと同様に、ディルムンもアモリ人が打ち立てた王朝であった可能性が高まりつつある。

バハレーン島は前 2250 年ごろまでほぼ無人の土地であったが、前 2250 年ごろに大規模な植民があり、続く500 年の間に7万基を超す古墳が築造されている。筆者たちの研究によって、バハレーン島で最も古い古墳群であるワーディー・アッ=サイル古墳群と酷似した古墳群が、アモリ人の故地とされるシリア沙漠に広く分布していることが明らかになってきている。日本隊の調査からも、ディルムンは、シリア沙漠からやってきたアモリ人が打ち立てた王朝であることが裏付けられようとしている(安倍・上杉・西藤・後藤 2017)。

現在、ワーディー・アッ=サイル古墳群に埋葬された人々の出生地を明らかにするため、出土した人の歯を対象にストロンチウム同位体分析を実施している。

## 謝辞

『バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト』の第4次調査を実施するにあたり、バハレーン文化古物局(The Bahrain Authority for Culture and Antiquities)のハリーファ・アハメド・アル・ハリーファ王子(Shaikh Khalifa Ahmed al Khalifa)、ピエール・ロンバール博士(Dr. Pierre Lombard)、サルマン・アル・マハリ博士(Dr. Salman al Mahari)から多大なるご支援、ご協力を賜った。この場を借り、感謝を申し上げたい。また、今回の発掘調査には、加藤舜也氏(筑波大学)にボランティアとして参加頂いた。この場を借り、御礼申し上げたい。

なお、本プロジェクトは、科学研究費助成事業基盤研究(B)『ディルムン文明の起源―バハレーン島における古墳群の考古学的調査研究』(研究代表者:後藤健、研究課題番号:26300030)によるものである。

## ■参考文献

- ・安倍雅史 2017「バハレーンに栄えた古代文明ディルムンの考古学」『文化遺産の世界』 https://www.isan-no-sekai.jp/column/20170426-2
- ・安倍雅史 2017「ディルムンの起源と専業化の発展」『Waseda RILAS Journal』5号 482-484 頁。
- ・安倍雅史・上杉彰紀・西藤清秀・後藤 健 2017「ワーディー・アッ=サイル古墳群から見た古代ディルムンの系譜」 『西アジア考古学』18号 1-15頁。
- ・後藤 健 2015『メソポタミアとインダスのあいだ―知られざ る海洋の古代文明』筑摩書房。
- ・後藤 健・西藤清秀・安倍雅史・原田 怜・濱崎一志・吉村和 久・岡崎健治・上杉彰紀・杉山拓己・堀岡晴美 2016「古代 ディルムン王国の起源を求めて一バハレーン、ワーディー・ アッ=サイル考古学プロジェクト 2015」『第 23 回西アジア発掘 調査報告会報告集』114-120 頁 日本西アジア考古学会。
- ・後藤 健・西藤清秀・安倍雅史・上杉彰紀・濱崎一志・吉村和 久・岡崎健治・堀岡晴美・鈴木崇司・成田 竣 2017「古代 ディルムン王国の起源を求めて一バハレーン、ワーディー・ アッ=サイル考古学プロジェクト 2016」『第 24 回西アジア発掘 調査報告会報告集』 94-99 頁 日本西アジア考古学会。
- ・後藤 健・西藤清秀・安倍雅史・上杉彰紀・原田 怜・岡崎健治・渡部展也・堀岡晴美 2018「古代ディルムン王国の起源を求めて―バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト 2017」『第 25 回西アジア発掘調査報告会報告集』72-76 頁 日本西アジア考古学会。
- ・後藤 健・西藤清秀・原田 怜・安倍雅史 2012『文化遺産国際協力コンソーシアム平成23年度協力相手国調査バハレーン 王国調査報告書』 文化遺産国際協力コンソーシアム。
- ・原田 怜・後藤 健・西藤清秀・安倍雅史 2013「文化遺産国際協力コンソーシアムによるバハレーン王国協力相手国調査」 『西アジア考古学』14号 79-88頁。
- ・原田 怜 2015「湾岸産油国の文化遺産保護」野口淳・安倍雅 史(編)『イスラームと文化財』112-125 頁 新泉社。